

2026年1月13日

アジア研究図書館

「日台における漢学・台湾研究の回顧と展望」シンポジウム

兼第5回台湾漢学講座 開催報告(板橋 暁子)

1

2025年度図書館総合展 出展報告(板橋 暁子)

7

アジア研究図書館利用案内

次号の予定

編集後記

編集・発行: 東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

「日台における漢学・台湾研究の回顧と展望」シンポジウム 兼第 5 回台湾漢学講座 開催報告

板橋 暁子
(RASARL 助教)

1. TRCCS 協定の概要

台湾の国家図書館は、2012 年より世界各地の教育研究機関と協定を結び、「台湾漢学リソースセンター」通称 TRCCS を協定校に開設してきた。東京大学は、アジア地域では 4 番目、日本国内では 1 番目の TRCCS 協定校として、2014 年 12 月 10 日付で国家図書館との間に協定を締結し、「台湾漢学リソースセンター」を学内に開設することで合意に達した。以来、この TRCCS 協定のもとで、東大は国家図書館から毎年、台湾の研究者による漢学および台湾学の成果たる学術書の寄贈を多数受け入れ、本学の多くの教員や学生がその恩恵に浴してきた。とりわけ、2020 年 10 月に東京大学にアジア研究図書館が開設されて以来、TRCCS 寄贈書はアジア研究図書館の一角に配架されるようになり、現在に至る。

本学はまた、TRCCS 協定に準じて、2015 年 11 月に第 1 回、2017 年 10 月に第 2 回、2019 年 7 月に第 3 回、2022 年 12 月に第 4 回の台湾漢学講座を開催し、いずれも台湾等の高名な研究者を招聘した。2025 年は第 5 回の開催年となったが、今回は主に日台両国からの登壇者と 5 つのセッションから構成される国際会議の形をとるものであり、従来以上の大々的な規模で挙行された。主催者は国家図書館、東大の附属図書館およびアジア研究図書館という三つの機関である。5 つのセッションは、東大側の TRCCS 委員会メンバー（川島真氏（TRCCS 委員長

／総合文化研究科教授）・松田康博氏（東洋文化研究所教授）・佐川英治氏（アジア研究図書館長／人文社会系研究科教授）・上原究一氏（東洋文化研究所准教授）・荒木達雄氏（U-PARL 特任研究員）・板橋）それぞれが中心となって自身の専門領域に関連するテーマを設定し（上原氏と荒木氏は同一セッション）、そのテーマに即して登壇者を招聘するという形で構成されたものである。

東京大学附属図書館/東京大学アジア研究図書館
国家図書館(台湾)共催シンポジウム

「日台における漢学・台湾研究の回顧と展望」
& 第5回 台湾漢学講座

2025/9/30 (火曜) 13:00-18:00
10/1 (水曜) 10:00-17:40

会場：東京大学総合図書館大会議室
<https://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/access>

詳細： <https://isp.ncl.edu.tw/conf-tjc2025>

講演：陳儀深館長（国史館〔台湾〕）
題目：亮光與暗影—尋找1945年前後台灣新生的印記

言語：日本語、華語

お申し込みはこちら
<https://forms.gle/85KWjGr3t1DRQE9>
or <https://ncl.taipei/a7>

廣告

2. シンポジウムの概要

同会議の正式な名称は「日台における漢

学・台湾研究の回顧と展望」シンポジウム兼第 5 回台湾漢学講座」といい、2025 年 9 月 30 日～10 月 1 日の 2 日間 (1 日半) にわたり、本学総合図書館 3 階大会議室にて開催された。並行して、Zoom によるオンライン配信も実施された。会議中の使用言語は原則として華語 (中国語) であり、報告者やセッションによってはスクリーン (PowerPoint) 上での日本語併記、質疑応答時の逐次通訳等が提供された (第 4 セッションは日本語で報告がおこなわれ、質疑応答時に中国語通訳が手配された)。

開催にもなつて国家図書館は本会議のためのウェブサイトの特設し¹、会議概要・プログラム・登壇者を紹介するページを設置している。登壇者のうち講演者もしくは報告者の氏名をクリックすると、講演／報告内容について比較的詳しい要旨をみることができる (華語・日本語併記)。ただし、概ね 7 月までに作成された要旨であるため、会議当日の報告題目や内容と一致しない場合もある。

1 日目は坂井修一氏 (本学附属図書館長)・佐川英治氏・翁誌聡氏 (国家図書館副館長) 三者の挨拶によって開幕した。

最初に「第 5 回漢学講座」として、陳儀長氏 (国史館館長) による基調講演「亮光與暗影：尋找 1945 年前後臺灣新生的印記 (光と影：1945 年前後、台湾新生の刻印を辿る)」がおこなわれた。台湾 (中華民国) の国史編纂等を司る機関の長官たる陳氏により、1 時間にわたる講演を通じて、アジア・太平洋戦争末期そして終戦後の情勢において台湾の地位が国際社会においていかに変動し、日本降伏により中華民国に接收された後の台湾においていかなる摩擦が生じたか、まさに台湾近現代史の「光と影」がマクロとミクロの視点で重厚に示された

ことは、大変貴重な機会であった。

つづく第 1 セッションのテーマは「臺日民國史研究對話 (日台間の民国史研究對話)」であった (主旨説明は川島真氏、司会は久保茉莉子氏 (埼玉大学大学院人文社会科学研究科准教授)、コメンテーターは吉澤誠一郎氏 (本学人文社会系研究科教授) および川島真氏)。

黄克武氏 (中央研究院近代史研究所特聘研究員) の報告「從現代化敘事到邊緣視角：臺灣民國史研究四十年之反思 (近代化ナラティブから周縁的視座へ：台湾における民国史研究四十年の省察)」では、①1980 年代における台湾の民国史研究の概況、②1990 年代以降の兩岸 (台湾・中国) 学術交流の進展、③2016 年以降に兩岸の学術交流がほぼ全面的に停止するに至った経緯、④台湾における民国史研究の特質とその貢献、⑤今日の台湾における民国史研究が直面する困難、という 5 部構成により、1980 年代以降の台湾における中華民国史研究の展開に対する回顧がおこなわれた。今後、台湾における民国史研究はもはや主流的な学問領域たりえない恐れがありつつ、一方で世界的な民国史研究の重要地点になりうる展望が示された。

徐兆安氏 (中央研究院近代史研究所副研究員) の報告「批判的現在主義：民國史研究在臺灣 (批判的現在主義：台湾における民国史研究)」では、民国史が 1949 年以降も続いてきたことをいかに理解するかという問いのもと、楊儒賓『思考中華民國』(2023 年) を導入として、現在の台湾において民国は「問題」あるいは「研究対象」と位置づけられていること、革命史観を脱却した上で梁啓超・顧孟余・胡適ら民国時期知識人エリートに対する再評価の潮流があることが示され、そして 1949 年以後も台湾に影

¹ <https://isp.ncl.edu.tw/conf-tjc2025>

響を及ぼしてきた権力の多様性の例として、憲法に定められた高等文官試験の省別採用制度や国語運動の推進が論じられた。

陳進金氏（国立東華大学歴史系教授）の報告「臺灣關於民國史研究的回顧與展望（台湾における民国史研究についての回顧と展望）」では、①1950～80年代の台湾における近代中国史研究の活発化とその制約、②1980年代半ば以降の兩岸文化交流の解禁ならびに90年代兩岸民国史研究者による学术交流の活発化と双方のイデオロギー脱却、③台湾における民国史関連の檔案（公文書）大規模公開ならびに兩岸学者の協力による民国史著作刊行、④2010年代以降における兩岸民国史研究の交流縮小と現代における民国史研究の苦境と展望、という4つの段階に分けて台湾民国史研究の展開が論じられ、90年代～10年代のような緊密な交流体制の回復が課題として提示された。

第2セッションのテーマは「現代臺灣史研究（現代台湾史研究）」であった（趣旨説明および司会は松田康博氏、コメンテーターは松本充豊氏（京都女子大学現代社会学部教授））。

陳翠蓮氏（国立台湾大学歴史系特聘教授）の報告「1960年代台獨人士遣返與日本的人權運動（1960年代における台湾独立運動者の強制送還と日本的人權運動）」では、過去30年間における台湾近現代史研究の焦点が整理された上で、1960年代日本政府による台湾独立運動者強制送還を事例として「国民党政府—日本政府—日本社会—台湾社会」の相互作用が論じられた。強制送還の背景として、台湾人在留をめぐる諸問題や日本と中華民国間で成立した（重大犯罪者との）交換に関する合意があり、また強制送還の実施は国会や世論など日本社会にも影響をもたらし、やがて政治亡命者をめぐる人権運動の展開や救援組織の成立を経

て、日本が台湾政治犯救出の重要拠点となってゆく過程が提示された。

林果頭氏（国立政治大学台湾史研究所副教授）の報告「1950年代香港報刊的對臺跨境傳播（1950年代香港の新聞・雑誌による台湾向け越境発信）」では、台湾の戦後政治史研究および冷戦史研究・新冷戦史研究（冷戦終結後に発展してきた冷戦史研究）が整理された上で、台湾における「文化冷戦（Cultural Cold War）」の焦点が示された。そして、国民党が経営していた新聞『香港時報』、中華民国寄りの立場を取った雑誌『新聞天地』、台湾と香港の各政党関係者が共同で編集した刊行物である『自由人』という3種の媒体を題材として、1950年代香港の新聞・雑誌に見られる特殊性や意義への考察がおこなわれた。

1 日目はここで閉幕し、夜は本郷キャンパス内にて懇親会が開催された。

2 日目の冒頭、第3セッションのテーマは「前近代中國性別史的展望（前近代中国ジェンダー史の展望）」であった（趣旨説明および司会は筆者、コメンテーターは小浜正子氏（日本大学文理学部特任教授））。

黄旨彦氏（中央研究院歴史語言所国科会補助延攬研究学者）の報告「魏晉南北朝の親道與交道（魏晉南北朝時代の親道と交道）」では、魏晉南北朝時代における子弟の社交の場において、その父母や父親の友人が果たした役割に対する考察がおこなわれた。①「父道」と「交道」は、前近代における世代間支援と社会資本再生産のモデルであった、②父親の不在は、ジェンダー関係の動態調整におけるキーポイントであった、③「期服の親（一年の喪に服す間柄の親族）」は、家庭ネットワークにおける父親の役割に代替する機能を果たした、④男性間の交友関係は、本来「期服の親」が家庭内で担っていた機能を吸収していった、⑤（亡き父親の役割を）母親が補完することで、男

性の社交領域への女性参入につながった、という観点が提示された。

衣若蘭氏（国立台湾大学歴史学系教授）の報告「性別與元明時代的家戸範圍（ジェンダーと元明時代の家戸の範圍）」では、中古時代の簿冊が家庭内の「尊卑」を記載の順序としていたのに対し、元明時代の簿冊は「性別」区分を用いて賦役機能をより重視する傾向にあったことを解明した衣氏の近年の研究成果にもとづき、元明時代に官府が家戸（労役賦課の単位）の調査・登記をおこなった範囲、および元と明という両時代の差異に対する検討がおこなわれ、元明時代の戸籍における奴婢記載の有無に関する原因、および家戸における奴婢の位置づけが論じられた。さらに、奴婢が戸籍制度から抹消されていた明代において、国家は人口および賦税制度を管理する観点から、同居して労力を供する「家人」でありつつ血縁上の「家人」ではない人々をいかに管理したか、という問いが提示された。

五味知子氏（慶應義塾大学文学部准教授）の報告「明清時期漢族士紳家庭中的養女與童養媳（明清時期漢族知識人家庭における養女と童養媳）」では、童養媳などの慣習をめぐる実態が、明清時期の漢族知識人家庭を主な対象として考察された。当該階層における童養媳の実践例として、夫方の家が女兒の養育を楽しむために嫁娶の時期を早めた例などがあり、また、養女はしばしば幼少時に実の父母を離れ、親族や保護者（いずれも女性）によって共同で養育されたこと、知識人家庭においては女兒を迎えて養育することは普遍的現象であり、養女の婚姻手配は親族ネットワークにおいて重視されていたことが提示され、子女養育における明清知識人家庭の柔軟な対応が明らかにされた。

第 4 セッションのテーマは「中國通俗文化中的文學與民間信仰（中国通俗文化にお

ける文学と民間信仰）」であった（主旨説明は荒木達雄氏、司会は上原究一氏、コメンテーターは山下一夫氏（慶應義塾大学理工学部教授））。

二階堂善弘氏（関西大学文学部教授）の報告「《封神榜》對寺廟的影響：以臺灣、新加坡和馬來西亞為例（『封神演義』の寺廟への影響：台湾とシンガポール・マレーシアを例に）」では、台湾や東南アジア華人社会における信仰の源流たる中国南方地域（福建・広東）の民間信仰は『封神演義』や『西遊記』といった明代白話小説の影響を受けて形成されたものであり、寺院や廟で祭祀される神々の造形もそれらの作品とりわけ『封神演義』からの影響を強く受けており、ひいては一部の神仙への信仰は『封神演義』により生み出されたこと、一方で伝播先の地域により独自の発展も見られることが指摘された。

王見川氏（南台科技大学通識教育中心助理教授）の報告（上原氏による代読）「《西遊記》中觀音的形象、弟子及其坐騎的由來：兼談台灣觀音騎龍事件（『西遊記』における觀音の形象、弟子、及び乘騎の由來：兼ねて台湾の觀音が龍に乗ることについて）」では、主に世徳堂本『西遊記』において觀音の形象（白鸚哥・善財・木叉恵岸を従え、獅吼に乗る）はなぜ一定の組み合わせで描かれるのかという問題について、觀音の形象の歴史的変遷をふまえて論じられ、さらに觀音信仰の中国化・本土化（在地化）の問題が取り上げられた。また、清代中期に民間で流行した「觀音が龍に乗る形象」の日本・台湾における伝播と影響関係も論じられた。

二ノ宮聡氏（北陸大学国際コミュニケーション学部講師）の報告「日本人眼中的民國時期泰山信仰（日本人から見た民国時期の泰山信仰）」では、シャヴァンヌ『泰山：中国人の信仰』に代表されるように、清末

以降中国内地に進出した列強出身の外国人による中国の文化・風習に対する調査活動の一環として泰山研究が進められるなかで、日本人による泰山研究の成果はいかに一般の人々に紹介されたのか、また、泰山や東嶽大帝に関する信仰活動はいかに理解されていたのかという問題について、戦前戦中の著作物を中心に論じられた。

林桂如氏（国立政治大学中国文学系副教授）の報告「《梁武帝西來演義》之花神與九曜信仰（『梁武帝西來演義』の花神・九曜信仰）」では、清代白話小説『梁武帝西來演義』（康熙 12 年（1673）天花藏主人序文）を題材として、梁武帝の前世や郗皇后に関する先行文献の記述が検討され、梁武帝と龍の関係、花と仏教の関係、花神と九曜信仰の関係に対する分析がおこなわれるとともに、同作全体に「内外」観念が通底していることが指摘された。

第 5 セッションのテーマは「東アジア史的現況（東アジア史研究の現在）」であった（趣旨説明および司会は佐川英治氏）。

甘懷真氏（国立台湾大学歴史学系特聘教授）の報告「東アジア世界如何具有一體性：從移民的角度（東アジア世界はいかなる一体性を有するか：移民の角度から）」では、1960 年代以降に西嶋定生により提唱された東アジア世界論は長期にわたり注目される一方で批判も受け、とりわけその一体論（東アジア世界は一つであるとする主張）に対する疑義にさらされてきたことが指摘されるとともに、越境移民の視点から東アジア世界論を再構築すること、「東アジア」とは何かを再定義することにより東アジアの一体性とは何かを改めて探ることの重要性が提起された。さらに、新たな東アジア史研究は、移民という現象、海民や商人のような仲介者、制度的な媒介に焦点を当てて展開されるべきことが論じられた。

李建民氏（中央研究院歴史語言研究所研

究員）の報告「一個人的「去」東亞史？（一個人の「脱」東アジア史？）」では、東アジアの共通性や一体性を重視する西嶋説や前田直典「東アジアにおける古代の終末」をふまえながら、東アジア史の複合的な性質をいかに理解すべきかという問題提起がなされ、東西両方面に展開した唐王朝の対外戦争や唐王朝をめぐる多言語世界、東アジア各地の漢文受容などを例として多極的な実相が指摘された。また、ゾミアとしての台湾という観点が提示された。

金秉駿氏（ソウル大学東洋史学科教授）の報告「同名異實：東亞各國之「東洋史」（同名異実：東アジア各国の「東洋史」）」では、中国・日本・韓国における「東洋」「東洋史」の歴史的用法が整理された上で、解放後の韓国において近代日本の歴史研究における「東洋史」の枠組みが踏襲されたこと、ただし「東洋史」には中国史と日本史のみが含まれた結果、朝鮮半島は中国大陸と地続きでありながら韓国史は「東洋史」から切断されたこと、ゆえに両者相互の有機的理解が不可能になったこと、その切断は近代国家を前提とする近代的思考に由来することが論じられた。また、韓国の歴史研究の観点から見ると、「東アジア世界論」の問題（古代日本への中国王朝の影響が過大評価された点など）が明らかになることが指摘された。そして、たとえば漢王朝中心の秩序と南越中心の秩序のように、一つの国際秩序は隣接する別の国際秩序と重なり合う事実にもとづき、そのような複数の国際秩序間の相互作用が拡大した範囲を「東部ユーラシア世界」と位置づける枠組みが提示された。

大津透氏（本学人文社会系研究科教授）の報告「日本的東アジア世界論之現況（日本における東アジア世界論の現在）」では、西嶋定生・堀敏一それぞれの東アジア世界論の特徴、および東アジア世界論に対する韓国

の学界や中央アジア史研究の立場からの批判が整理された上で、中国文明圏の辺境という点で共通する唐代西州と古代日本が例として検討された。唐太宗は高昌国滅亡後に西州を設置したが、田地に限られている西州でも律令に準じて戸籍・計帳等（正倉院文書と完全に対応）が作成され、均田制に近い田制の運用がおこなわれており、一方で古代日本の班田収授法は、唐の均田制のうち屯田制の要素を継承したのみとされてきたが、日本律令の特徴は条里制により土地開発を進めて熟田を民に分配することであり、西州実施の均田制と対応するものであって、農耕を基盤とする国制たる律令制こそ東アジア世界というまとまりの根本的な構成要素であることが提示された。

最後に、佐川英治氏および翁誌聡氏による閉会挨拶がおこなわれ、盛況のうちに閉幕した。



本会議の終盤に、全セッションの登壇者が意見を交わす総合討論の場は設定されなかったが、第 5 セッションのテーマは 2 日間の会議の締めくくりにふさわしい包括的なものであった。近年は東部ユーラシア論の浸透によって透明化されがちな東アジア世界論を、さまざまな位相から「生きた、有効な」枠組みとして捉えなおすという試みが、台湾・韓国・日本を代表する古代史

(前近代史) 研究者によって示されたことは、本会議を通じてもとりわけ大きな成果でなかったかと考えられる。

3. おわりに

今回の登壇者のなかで、台湾と日本以外からご参加いただいたのは韓国の学者 1 名（金秉駿氏）のみであった（付言すると、本会議の登壇者招聘費用の大半を負担したのは国家図書館であるが、招聘対象者に関して国籍・所属機関等の条件は設定されていない）。しかし、対面およびオンラインでの一般参加者のなかには中国出身とみられる方も一定数おられ、今回の会議全体もしくは個々のセッションや報告のテーマに関心を持っていただいたものと思われる。

歴史的経緯からいって、「台湾と中国の間に日本が介在する、あるいは架橋する」という構図自体にはセンシティブな問題が含まれるが、大陸あるいは台湾では開催が難しい（また、大陸から台湾へ赴いて参加することが難しい、あるいはその逆の）性質の国際会議を日本など第三の国で開催し、兩岸それぞれの立場に即した問題設定や問題意識を論じることには一定の意義がある。本会議の開催時期は 2025 年秋であるが、とりわけ同年末以来の国際情勢のもとでは、東アジア地域の相互理解と安定維持のために本会議のような学術交流の場の重要性はいっそう高まると思われる。

東大がホスト校となる TRCCS 協定関連のイベントとしては、本会議はかつてない規模のものであり、1 年以上前から国家図書館と東大の間で準備が進められ（東大側の窓口は、川島真 TRCCS 委員長が専ら担当された）、ようやく実現に至ったものであった。最後に、学生アルバイト各位や台日双方の事務関係者各位を含め、本会議開催のために尽力くださった各方面の皆様から謝辞を申し上げ、結びとしたい。

2025 年度図書館総合展 出展報告

板橋 暁子

(RASARL 助教)

1. はじめに

図書館総合展は 2025 年度に 27 回目を迎えた。公共・大学・学校・専門図書館を問わず、あらゆる館種の図書館の運営に関わる人々が一堂に会し、それぞれの機関の活動を広報し、情報を交換し、同業界人として交流を深める場と位置づけられている。

2025 年度は RASARL として 3 回目の会場出展である（出展者名義は「東京大学アジア研究図書館」）。例年と同じく、ポスターセッション形式での参加となった。



2. 開催方式について

2025 年度図書館総合展は、3 日間にわたる本展の会場開催(2025 年 10 月 22～24 日)

のほか、オンラインでの会期が 2 回（第 1 期：6 月 21 日～7 月 4 日、第 2 期：11 月 10 日～23 日）にわたり設定された。また、各地域での取り組みや課題を全国の図書館関係者と共有する場として例年開催されてきた「地域フォーラム」は、本展に先立つ 5 月 24 日に茨木市文化・子育て複合施設おにクルにて「図書館総合展 2025 フォーラム in 茨木」が開催された。

総合展本展の主たる会場はパシフィコ横浜 HALL C とアネックスホールであり、ポスターセッション出展者は HALL C のうち右奥の区画に配置された。HALL C にはほかに、図書館業界に関連する企業ブースのほか、アカデミックブース、スピーカーズコーナー、特定テーマのブース（「災害と図書館 2025」「あなたも使える専門図書館 2025」）等が設けられた。2025 年度はさらに、AI ツールの活用が図書館業界でも大きな課題となりつつある当今の時勢を反映し、「AI と図書館」ブースが新設された。

HALL C は常設展示用の会場であるが、会期中は他に 9 つの会場（第 1～第 6 はアネックスホール、第 7～第 9 はホール棟コンコース沿い）にて講演会・ディスカッション・ワークショップなどが開催され、「フォーラム会場」と総称される。

主催者発表によれば、2025 年度の総入場者数は 14,023 名、当館含む会場ポスターセッションは 58 件、会場ブースは 77 件、会場アカデミックブースは 19 件、1day 出展

は 9 件、会場フォーラムのイベント開催件数は 67 件であった。

本展開催期間に先立ち、図書館総合展ウェブサイト上に参加形式ごと、出展者ごとの広報ページが設けられた。昨年度までと同じく、ポスターセッション出展者の場合は「2025 年度 ポスター」ページ¹にリンクを貼る形で各自の施設やイベントに関してアピールする方式がとられ、アジア研究図書館も広報ページを掲載した²。本学からの出展者としては、ほかに柏図書館が本展会場のポスターセッションに参加し³、アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) がオンラインのみのポスターセッションに参加した⁴。



3. アジア研究図書館の出展内容

今回のポスターセッション出展者のうち会場参加者に対しては、昨年と同じく幅 160cm×高さ 240cm のスペースが提供され、そのうちポスターを掲示するパネルは幅 99cm×高さ 183cm であった。また、パイプ

椅子 1 脚が貸与されたため、冊子状の配布資料の置き場として使用した。

当館スペースの設営は、開催初日 (22 日) 午前 8 時～10 時の「出展者準備時間」に筆者がポスターを搬入・掲示して作業を完了した。なお中日 (23 日) は河崎助教が、最終日 (24 日) は河原准教授が展示に立ち会い、撤去作業は 24 日閉会までに完了した。

今回の当館ブースは昨年と同じく A0 サイズ (幅約 84cm×高さ約 119cm) のポスターを掲示し、その左側のスペースにてアジア研究図書館パンフレットおよびニューズレターの近刊数号、2022～23 年刊行の『アジア研究図書館叢書 1, 2, 3 (アジア研究図書館所蔵ユネスコ・アジア文化センター識字教育資料目録 1, 2, 3)』各 1 部、2023 年度刊行の『識字教育資料からアジアの社会をみる』図録数部、2024 年度刊行の『文化も薫る聖なる敷居：レーザー廟図書館協力覚書調印記念展示』パンフレット数十部、そして『令和 6 年度東京大学アジア研究図書館活動報告書』数部を配布した。3 日間を通じてほぼ全て捌くことができ、とくに図録は早々に払底したため、来年度以降はより多くの搬入を検討してもよいと思われた。

今回展示したポスターの主題は、2021 年度にアジア研究図書館が受贈した高瀬弘一郎氏 (慶應義塾大学名誉教授) 蔵書の 5 年にわたる整理作業が完了したことを記念して開催する展示会「キリスト教とアジア世界—高瀬弘一郎コレクションからみる—」

(11 月 28 日 (金)～12 月 26 日 (金)) および、寄贈にあたり仲介の労をとっていただいた岡美穂子氏 (本学史料編纂所准教授) による記念講演会 (12 月 11 日) の広報であった。高瀬氏の専門は近世日欧 (とくに

¹ <https://www.libraryfair.jp/poster/2025>

² <https://www.libraryfair.jp/poster/2025/169-0>

³ <https://www.libraryfair.jp/poster/2025/289>

⁴ <https://www.libraryfair.jp/poster/2025/297>

ポルトガル) 交渉史およびキリシタン史であり、寄贈資料の多くも南欧語の文献であることから、高瀬コレクションにおける研究対象のビジュアルを具体的に喚起させる画像として、「南蛮屏風」2種からの抜粋をポスターの上部・中部・下部に配置した(同作品を所蔵する神戸市立博物館より使用許諾を取得済)。そのほか、高瀬コレクションのうち本学総合図書館の基準で貴重書と認定されたフェルナン・メンデス・ピント著『東洋遍歴記』(1614年初刊本)扉絵や、C. R. ボクサー蔵書印などの写真を使用した。

4. 会場イベント等

ポスターセッション以外の活動として、アジア研究図書館は昨年度に引き続き、「あなたも使える専門図書館 2025」(主催: 図書館総合展運営委員会) および「図書館総合展 2025 ポスター&アカデミッククイズラリー」(主催: Jcross ((株)ブレインテック)) というイベントに参加した(後者はクイズ出題者としての参加)。

イベント以外にも、非営利企業を中心とするポスターセッションおよび営利企業を中心とするブースは例年継続して出展されるものが多いが、今年度初めて登場したブースとして、上記のとおり「AI と図書館」ブースがあった。これは「災害と図書館 2025」ブースと同じく図書館総合展運営委員会が出展するものであり、展示と並行して 10 月 22 日には「AI と図書館」をテーマとするフォーラムが開催された⁵。筆者は残念ながら参加できなかったが、同フォーラムでは各種営利企業のプレゼンテーションに先立ち、「AI とはそもそも何か: 図書館(員)のための AI 入門(その 1)」(野末俊比古氏(青山学院大学教授)というレクチャーが設けられるなど、一般来場者に向け

て入門的な知識を幅広く提供する場という役割も果たしており、今後も同様の趣旨のイベントの展開が期待される。

5. おわりに

2025 年度図書館総合展の会場ポスターセッションに当館以外で東大から参加したのは、上記のとおり柏図書館である。開催初日に柏図書館の出展担当者より伺ったところ、2025 年に開館 20 周年を迎えた同館は、今回が初めての出展とのことであったが、非常に洗練されたディスプレイがおこなわれ、当館も学ぶべきところが多かった。また同館のポスターは、東大における柏図書館の位置づけや、独自の設備、サイエンスカフェ等の定例イベント、「柏図書館友の会」の活動など、通常業務を中心に紹介をおこなうものであり、同館の特徴を対外的に分かりやすく表現していた。

また、上記のとおり U-PARL はオンラインにて出展をおこない、2025 年度は「サブジェクトライブラリアン業務の開拓」「U-PARL のデジタルアーカイビング活動に基づくデジタル展示」「U-PARL スタッフによるおすすめ資料の紹介」という 3 つの項目から成るページを公開した。とくにデジタル展示に関しては公開元の各プラットフォームにリンクが貼られ、オンライン出展ならではの特性が大きく活用されている。

オンライン出展は表現の技法と空間が豊富にあることで、場合により時間をかけた試行錯誤と取舍選択が必要になるが、一方で会場のポスターセッション出展は、「画面一枚でいかに伝えるか」という点を突き詰めることが求められる。同じ出展者の立場として、今後も各出展者のコンテンツを楽しむとともに、その伝達手法から啓発を受けてゆきたい。

⁵ <https://www.libraryfair.jp/forum/2025/1831>

アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

開館時間

	曜日等	通常期	8月・3月
	月～金曜日	9:00～22:30	9:00～21:00
	土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

次号の予定

第23号は令和8年4月6日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館 ([asialib\[at\]lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib[at]lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

編集後記

第22号をお届けします。

前号の編集後記で、私が研究対象とする宗教の文献について大規模デジタルコーパスはない、という話を書きました。今回はその補足として、その状況を打開する可能性のある重要なプロジェクトをひとつ紹介しておきます。ご興味のあるかたはご参照ください：Prakrit Digital Text Project

https://github.com/aso2101/prakrit_texts

(J)